

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	酒井 健太郎
主な担当科目	音楽芸術運営基礎演習, 音楽芸術運営特別演習 ①, 音楽芸術運営特別演習 ②, 音楽情報論, 基礎ゼミ, 図書・図書館史, 図書館実習, 卒業研究 大研, 博士特別運営研究②, 博士特別運営研究③, 博士論文演習②, 博士論文演習③
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	履修者に関心をもってもらい、学修に対する積極性や主体性を引き出す授業をおこなう(iMacやiPhoneで消費者に新しい生活スタイルを提案して、ニーズを創出してしまったApple社のように)。履修者を「落とす」ための授業はしない。そのための策として、第一に、授業の進め方や履修者にしてもらわないとならないことなどは、きちんと説明して、必要に応じて繰り返して、理解してもらう。そこで躓かせない。第二に、履修者の状況に応じて授業準備を入念におこなう。 また、学生の論文執筆の支援を丁寧におこなう。成果物の体裁を整えることに傾注するのではなく、最大限に自分で書かせる。そうすることで学生の文章力と思考力を高める。学生自身が持っている力を引き出す(名料理人が素材本来の味を引き出すように)。
2024年の教育に関する自己評価	履修者の関心をもってもらうために、できるだけ学生に身近な問題を設定し、参考資料としてメディア・コンテンツを多く用いるなどの工夫をした。 出席・成績不良者には個別に対応するなど、学生の状況に合わせた指導をすることで、履修者をできるだけ落とさないようにした。 学生の論文執筆の支援を丁寧におこなった。時間がある限り、自分で考えて自分で書かせた。留学生への指導に際しては、例えばある文章について添削・修正指示をするだけでなく、ことばや文章の含意や周辺知識まで共有することで、日本語能力が全体として向上するよう丁寧に指導した。 よい研究をするためには、大きな枠組みを構想する(問題の所在を把握する)俯瞰的アプローチと、小さな事象について観察して記述を積み重ねる(具体的な研究をおこなう)微視的なアプローチの両者が必要である。どちらも蔑ろにするわけにはいかず、学生が両アプローチから研究を進められるよう指導した。 良い論文を書くためには、情報(データ)、データの分析結果、分析結果にもとづく考察を理論的に記述する力が必要である。殆どの場合、学生はそうした力が十分とは言えず、トレーニングすることが肝要である。その点に留意して指導した。
2024年のFD活動に関する自己評価	参加した研修会については積極的に取り組んだ。大学院FD研修会(3/12)ではグループワークで書記の役割を担い、FD・SD合同研修会(9/10)では分科会のファシリテーターを務めた。音楽教養分科会FD研修会では、分科会主査として司会を担った。実技担当の先生が参加された研修会では、実技の担当ではない教員として、学生がどのように見えているか、事例を交えて報告・共有し、実技系の先生方との意見交換に努めた。
授業改善のために取り入れた研修内容	学生が多様化するなかで、学生のベースラインがどこに設定されているかー例えば健康で意欲的な学生は、能力を伸ばすことを学修の目的と設定できるが、体調がすぐれない学生はまずは登校できる／できないにベースラインを設定せざるを得ないーを捉えて、それに合った指導をすることがまずは重要であろう。FD研修会に参加される教員も多様であり、学生のベースラインの位置というものについて考慮される方ばかりではない(芸術を追求すれば、個々人の事情を優先する度合いが低くなるのは自然なことである)。そこで、まずは学生が多様であるというのはどういうことか(ベースラインの位置には学生個々に違いがあるのは致し方ない)ということを示す事例を共有するよう心がけた。逆に、実技系の教員の話聞いて、優秀な学生のベースラインの設定のしかたについて学ぶことも多かった。

2024 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1851 教員名:酒井 健太郎

1)アンケート結果に対する所見

[3605「音楽芸術基礎演習 アートマネジメント」]

履修者が自分の出席状況を把握しているか問う Q4 のスコアが 90%で全体平均(91%)を下回ったが、その他の項目は 4.00 であった。「論文のためになった」という自由記述(ただ 1 名の回答だが)があったのは心強い。履修者 6 名という小さい科目で、丁寧な授業運営をしやすいのが、高スコアになった要因だろう。

[1188「ピアノ教養特論Ⅰ」]

履修者が自分の出席状況を把握しているか問う Q4(85%)と、授業外学修の時間を問う Q7(45 分)で、全体平均(それぞれ 89%、56 分)を下回ったが、その他の項目では全体平均を上回った。科目を統括されている先生のご功績だろう。

2)要望への対応・改善方策

[3605「音楽芸術基礎演習 アートマネジメント」]

要望と言えるものは特に示されなかったが、履修者の修士論文執筆の役に立つ授業になるよう、引き続き改善を心がける。

[1188「ピアノ教養特論Ⅰ」]

授業で使用したスライドの Teams 等での共有を希望する自由記述があったので、可能な範囲で対応する。

3)今後の課題

[3605「音楽芸術基礎演習 アートマネジメント」]

履修者の修士論文執筆の準備をする授業として、どのような授業内容が適当であるか検討を継続する。

[1188「ピアノ教養特論Ⅰ」]

この科目の対象者はピアノを専攻する学生であることから、専攻の先生と情報共有をするなどして、できるだけ学生のニーズを把握する。

以 上

2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1851 教員名:酒井 健太郎

1)アンケート結果に対する所見

「図書・図書館史」(2018) スコアは概ね良好で、特に Q10 の「満足度」は満点であった。
「音楽情報論」(2253) スコアは概ね良好で、特に Q10 の「満足度」がだいぶよい。
「卒業研究 音楽教養」(2577) スコアは全体としてはそう悪くはないのだが、特に Q6 の「わかりやすくするための工夫」が顕著に低いのが気になる。授業の内容なのか、あるいは授業のシステム(運用方法)なのか、どちらだろうか。「ピアノ教養特論 II」(2671) スコアは概ね良好だが、Q10 の「満足度」が平均を下回っているのが気になる。Q5 の関心の度合いが低いことと無関係ではなからう。

2)要望への対応・改善方策

「図書・図書館史」と「音楽情報論」は、いずれも単独で担当している科目だが、Q2の「シラバスに基づく授業」についてはどちらも平均よりスコアが低かった。授業にはできるだけ新たな情報を採り入れ、また、受講者の反応を見て説明を増減する等のことをするため、授業回によって伸縮がでてしまい、シラバス通りに授業を実施するのは難しい。このことを履修者によく説明する一方、できるだけシラバスに沿って進めるよう努める。
「卒業研究 音楽教養」は音楽教養分科会担当科目である。Q6 の「わかりやすくするための工夫」が顕著に低いことについて、分科会で意見交換して、改善方策を探るようにしたい。
「ピアノ教養特論 II」で、授業の資料を Teams 等で共有してほしいという要望があったが、これに対応することは比較的容易である。授業の主担当の先生と相談したうえで、可能であれば今年度より実施したい。

3)今後の課題

「音楽情報論」の自由記述で、「非常に勉強になり、唯一無二の授業」「多種多様な音楽、映像に触れることができ、楽しく受講」できたなどのコメントがあり、これらは今後の力になる。ますます精進したい。一方で、「授業が終わる 20 分前に来たり、授業中にどこかに行く生徒が多い」という指摘もあり、真面目に取り組んでいる受講者とそうでない受講者のギャップが気になる(「ピアノ教養特論 II」でも「きちんとやっている側からすると若干疑問に思う」という指摘があり、両者は根底に同じものがあるように思われる)。単位を取得できれば良い学生と、授業内容を身に付けたい学生とは、どうしても態度に差が生じる。前者をも惹きつける授業ができれば理想的だが、そう簡単にいくものではなく、ただ無理やり抑えつければよいというものでもない。指導法のヒントやコツを FD 研修会や資料・文献等で学びたい。

以 上